

BOOK HUNTING

ブックハンティング



2008

出版ニュース

関西モダニズム再考

編 ●竹村民郎、鈴木貞美

竹村民郎・鈴木貞美編『関西モダニズム再考』(A5判・573頁・8500円・思文閣出版)が出版された。これは国際日本文化研究センターにおいて二〇〇〇年から三年にわたって行われた国際共同研究「日本のモダニズム——関西を中心とした学術的研究」が基礎となった論文集である。

内容は大きくI、II、IIIと分かれているが、このうちIIIは189ページに及ぶ長大な一本の論文(鈴木貞美「モダニズムと伝統、もしくは『近代の超克』とは何か)である。Iには五本の論文が、IIには八本の比較的短い論文ないし調査報告が収められており、各論文には章番号が付されていない。

竹村民郎は「はじめに」において、「十九世紀末葉から二十世紀初頭に根源的に提起された『近代』の諸問題につ

いての批判が、現代なおくすぶり続けている」といい、本書では「日本の近代化が提起した諸問題を『関西モダニズム』の視点から考察」という。そして、なぜ「関西モダニズム」という点については、「近代化の基本的な問題を考えようとするとき、ほとんどあらゆる領域で『関西モダニズム』が提起した問題に直面し、それを避けて通ることはできない」からだと述べている。

Iの一番目の論文「阪神基調」(竹村民郎)では、1905年、阪神電鉄の住吉駅(現在の神戸市東灘区)が開設されたあと、この周辺に大阪の富商や大会社の社長、重役たちが海辺と田園と山に恵まれた郊外生活を求めて移住したことに始まるモダンな生活コミュニティの形成とその運営について解説している。「田園都市」という考

え方の実践は、イギリスで1903年に「田園都市」レッチャワースの建設がスタートしており、日本では1907年に内務省地方局が「田園都市」という本を出版している。それを「煙の都」といわれた大阪の私鉄が取り入れ、またイギリス在住経験のある大会社重役たちもその計画を支持したのがきっかけになった。住吉に移住してきた豊かな人々は、さまざまなコミュニティ事業を行った。生活物資を確保するために消費共同組合をつくり、子女の教育のために甲南学園などの学校を創設し、近代的な病院を建てた。特筆すべきことは、女性の生活が激変した点である。大阪の商家の主婦は職住が一致していたが、ここに来て多忙であったが、ここに来て職住分離となり、時間的余裕ができた。もともと経済的には裕福であったから消費生活が花開き、海外在住経験者も多か

また教育事業に熱心であった。甲南学園の創設から運営の中心人物となったのも彼の信念によるものであろう。また平生は田弘毅内閣の文部大臣に就任したあと、戦時下の産業統制団体の長をいくつも務めている。平生は著書はなく講演集が残っているが、そのほかに1913年から45年までの膨大な日記があり、これが甲南学園に寄贈されて、現在解説が進められているという。本論文にもその一部分のコピーが掲載されているが、かなりのクセ字で英語混じりの長大なものなのである。この日記は単なる事実記録ではなくて、直面したそれぞれの問題に対する平生の見解がきちんと書かれている(例示された2・26事件当時の日記は相当に興味深い)から、解説が完成すれば戦前・戦中の日本の政治・経済・教育問題にとって貴重な情報が得られるであろうと期待される。

Iの四番目の論文「前川國男と日本近代建築」(松隈洋)は、1920年代末にル・コルビュジエのアトリエに在籍した前川の思想と仕事を紹介しているが、特別に関西とかかわる要素はないようだ。

Iの五番目の論文「大衆女性雑誌における競合的消費主義」(バーバラ・佐藤)は大正期の大衆女性雑誌と女性の消費意識

について論じている。当時新しい女としてモダンガールがもてはやされたが、大衆女性雑誌読者の主力は「あまり裕福でない女性たち」であり、彼女たちは雑誌のなかの広告、通信販売、合理的・文化的な生活提案などを介してモダンなライフスタイルに近づいたという。

IIの一番目の論文「歌人前川佐美雄の場合」(高橋陸郎)は、奈良生まれの前川が、言葉による芸術表現の中で、どのようなモダニズム、日本、大和などをどう遍歴したかを書いている。

二番目の論文「梶井基次郎『檸檬』に見る大正末・モダン京都——『京都日出新聞』の紙面から——」(中河督裕)は、三高の学生として四年半を京都で過ごした梶井が作品の中に描いた京都の街の様相を、当時の新聞記事によってその近代性をより詳しく確認しようとした報告である。三番目の論文「大阪におけるカフェ文化と文藝運動——明治末から大正初期を中心として——」(増田周子)は当時のモダニズムの一面を象徴するカフェ文化について、東京と大阪



の有力なカフェとそこに集う作家や芸術家たちの動向を調べた報告である。四番目の論文「関西『マヴォ』について——牧野雄と『マヴォ』 関西支部」(五十殿利治)は、大正期の新興美術運動の中で、関西において最も突出した集団であった「マヴォ」関西支部の活動的なメンバーであった牧野雄が経歴その他が不詳であるので、周辺資料からこの人物について調べようとした調査報告である。

IIの五番目の論文「築地小劇場と関西新劇運動——ドイツ表現主義から西の影をめぐりに——」(依岡隆児)は、東京における築地小劇場の試みに刺激をうけた関西の新劇運動をとりあげている。六番目の論文「関西モダニズムと西洋体験——画家たちとその周辺——」(稲賀繁美)は、二十世紀初頭に多くの関西の画家がパリに渡り、さまざまな刺激を受けて帰ったことを紹介している。七番目の論文「橋本関雪とアジア」(西原大輔)は、中国と深く結んだ日本画家・橋本関雪の軌跡を述べ、近代日本美術がアジアに与えた影響についても注目しておくべきと指摘している。

IIの八番目の論文「『関西モダニズム』における大衆文化の

位相——宝塚少女歌劇と手塚治虫の漫画に関連して——」(竹村民郎)は、まず宝塚少女歌劇のスタートから確立までを描き、宝塚は関西の伝統的大衆芸能の豊かな土壌から誕生し、阪急電鉄の小林一三に明確な理念と先見性があったことがその発展の基礎にある、と述べている。また宝塚市で幼少期を過ごした手塚治虫の『リボンの騎士』は女が男役をつとめる宝塚からヒントを得たものではあるが、執筆者・竹村は、宝塚の男役に表象される虚構の性と、サファイヤ女王の両性具有の性の葛藤ではかなり違うのではないかと述べている。

III

の長大な論文「モダニズムと伝統、もしくは『近代の超克』とは何か」(鈴木貞美)は、その文末に「日本の二十世紀には近代社会の弊害を克服しようとする様々な志向が渦巻き、……試行に移され(たが)おおむね成功しなかった。……その意図がどこにあり、なぜ失敗したのか、少なくとも、そのような分析の方向だけは、本稿を通じて明らかにしえたいと思う」と述べている。このような意図をもって執筆者・鈴木は、明治以降中までの「日本文化・思想」のいわば「外国に影響されながらの近代化模索

史」(これは私の造語である)を分析するのである。優に単行本一冊に匹敵する量と質をもつ論文を要約することはむずかしいので、その中から「大正生命主義」に関する考察に注目してみた。日本で近代が生み出す弊害の克服を目指す思想が活発になったのは、日露戦争のもたらした被害であった。兵士は傷つき、労働者は心身を病み、都市は汚れた。これに対して伝統的価値観に基づく新しい国民文化の創造で解決しようとする考え方が強まり、1910年代から20年代前半に「生命」を至高の原理とする生命中心主義が顕著となった。それとともに芭蕉、新古今、幽玄の美などの再評価が起る。一方朝鮮半島や中国で激しい民族独立運動があり、文化相対主義が認識され、それは文化ナショナリズムに、それは日本精神論になり、生命主義の日本の実現が皇国思想であるとされるようになる。政治的には大東亜共栄圏が構想されるが、共栄である限り文化多元主義であり、「西欧列強の帝国主義」が「近代」であるからアジアが協力してこれと戦う戦争が「近代の超克」である、という思想展開になった。その結果がああ戦争になる。このような解釈では執筆者にお叱りを受ける

かもしれないが、ともかく本論文は、各時期における外来思想と日本側にかけていた思想との絡み合い、取捨選択、適用、拡大、換骨奪胎ぶりを多くの著作から分析している。熟読すべき論文であると思う。

本書全体としては、IIIのような抽象度の高い通史的総論と、Iのような事実追跡やIIのような調査報告とが同居している、あまりバランスがいいとはいえない。しかし、個別テーマの追跡や調査こそが基本的作業であって、それらを抽象化したうえで一般論が成立しうるのである。だから形式としてはこのような構成は妥当であると思う。次なる課題として私が期待したいのは、IIIの鈴木論文の戦後版をまとめることによって近代日本文化思想史の通史を完成させること、そしてI、IIでとりあげていない他の領域の事実追跡を行ってテーマ領域の幅を広げることである。さらにもっと欲張るならば、たとえモザイク状になってもよいから各時代の関西文化の諸領域を調査して、関西文化の全貌に迫ってみることはできないだろうか。

最後に、これだけ大部な専門書を出版した版元の英断に敬意を表したい。

中川隆介(評論家)・評